

平成27年度 鹿児島大学 FD報告書



鹿児島大学FD委員会
KAGOSHIMA UNIVERSITY Faculty Development

CONTENTS

I. 平成27年度FD報告書作成にあたって	
■ FD委員会委員長(教育担当理事)	2
II. 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針	4
III. 鹿児島大学のFD活動	
第1部 全学的取組	5
■ 新任教員FD研修会	6
■ FD・SD合同フォーラム	9
■ 学生・教職員ワークショップ	13
■ 鹿大版FDガイド第10号、第11号の発刊にあたって	23
■ さつつんカフェ	24
■ 教育センター高等教育研究開発部(共通教育)のFD活動	26
第2部 各学部・研究科のFD活動報告	35
■ 法文学部、人文社会科学研究科	
■ 教育学部、教育学研究科	
■ 理学部	
■ 医学部	
■ 歯学部	
■ 工学部	
■ 農学部、農学研究科	
■ 水産学部、水産学研究科	
■ 共同獣医学部	
■ 理工学研究科	
■ 医歯学総合研究科	
■ 保健学研究科	
■ 司法政策研究科	
■ 臨床心理学研究科	
■ 連合農学研究科	



平成27年度FD(ファカルティ・ディベロップメント)報告書作成にあたって

鹿兒島大学FD委員会委員長(教育担当理事)
清原 貞夫

全学的なFD活動が行われるようになり15年が経ち、その意義と理解は徐々に定着してきました。各学部の教育研究職員、教育センターメンバー、事務系職員みなさんの努力の下、年間を通してそれぞれのディベロップメントに向かって精進してまいりました。

FD委員会のミッションは、本学が掲げる教育理念・目標を達成するための教員の教授法の開発、授業力アップ、学習効果をあげるための学生支援です。昨今ではさらに、各学部のカリキュラム・プログラムの再構築への提言も求められています。平成22年度以降のFD委員会の活動の詳細は、HP(<https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/fd.html#000825>)をご覧ください。

平成27年度も今まで同様、「FD研修会」、「学生・教職員ワークショップ」、「FDガイド」の3つのワーキンググループが企画・運営し、「FD・SD合同フォーラム」は教育担当学長補佐を中心として運営に携わる体制としました。

継続的な取り組みとして以下の5項目を行いました。

- ・新任教員FD研修会「アクティブ・ラーニングの基本と活用術」
- ・FD・SD合同フォーラム「カリキュラムの体系的可視化に向けて」
- ・学生・教職員ワークショップ「授業アンケートの結果をどう授業に活かすか」
- ・FDガイド第10号、第11号にて「離島における地域実習」のテーマで発行
- ・平成26年度に引き続き、大学IRコンソーシアムの学生調査(1年生調査、上級生調査)の実施

新たな取り組みとして以下の2項目を行いました。

- ・「さつつんカフェ」
- ・平成28年度に全専任教員の75%以上がFD活動参加を達成するよう活動計画を平成27年度中に各部局で検討してもらった。

FD活動は教職員個々人の向上意識と自発的な取り組みが不可欠であり、教育を改善するには多大な時間と労力が必要です。授業力アップには各教員の最も大切にしている価値に根ざすことが肝要であり、その中心的「核」となるものは各人の研究領域での活動であると思います。したがってFDでは研究活動が教育に密接に関わることを自覚し、教授法の向上とキャリア形成を同時に目指し、全教職員が一步一步粘り強く、研究・教育活動を継続推進してもらいたいと念じています。

平成27年度 FD活動一覧

6月	共通教育前期授業公開・授業参観(6/29~7/10)
8月	鹿大FD報告書(平成26年度)の作成
9月	新任教員FD研修会(9/17)
10月	FD・SD合同フォーラム(大学地域コンソーシアム鹿児島FD・SD活動事業部会と共催)(10/3) 鹿大版FDガイド第10号の作成 共通教育後期授業公開・授業参観(10/26~11/6)
11月	大学IRコンソーシアムアンケート実施
12月	学生・教職員ワークショップ(12/11)
2月	鹿大版FDガイド第11号の作成

平成27年度 FD委員会委員

所 属	氏 名	所属ワーキンググループ
理事(教育担当)	清原 貞夫	
学長補佐(教育担当)	有倉 巴幸	
教育センター長	飯干 明	
教育センター副センター長	富原 一哉	学生・教職員ワークショップ
教育センター高等教育研究開発部長	寺床 勝也	FD研修会
教育センター高等教育研究開発部	洪井 進	(9月末まで)
教育センター高等教育研究開発部	伊藤 奈賀子	
法文学部	梁川 英俊	FDガイド
教育学部	假屋園 昭彦	FDガイド
理学部	半田 利弘	学生・教職員ワークショップ
医学部	新地 洋之	FDガイド
歯学部	後藤 哲哉	FD研修会
工学部・理工学研究科	甲斐 敬美	FD研修会
農学部	坂巻 祥孝	FDガイド
水産学部	石川 学	FD研修会
共同獣医学部	大和 修	学生・教職員ワークショップ
医歯学総合研究科	田川 まさみ	FD研修会
司法政策研究科	采女 博文	FDガイド
臨床心理学研究科	松木 繁	学生・教職員ワークショップ



鹿兒島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針

平成26年7月17日
教育研究評議会決定

鹿兒島大学(以下「本学」という。)は、鹿兒島大学学則(平成16年規則第86号)第2条において、鹿兒島大学憲章の下に、広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、もって学術文化の向上に寄与するとともに自主自律と進取の精神を持った有為な人材を育成することを目的とすると定めている。本学は、この教育研究上の目的に根ざした人間を育成することができるように、質の高い教育を実施する責務を負っている。そのためには、大学として、教育の内容や方法の開発・改善を組織的かつ継続的に行い、より実質的なものへとしていく必要がある。

(目的)

第1 この指針は、本学におけるファカルティ・ディベロップメント(以下「FD」という。)を推進していくために必要な事項を定め、教育の内容や方法の開発・改善及び教育研究に関する研修についての責務を明記することで、教育の質の向上及び学生支援の円滑な遂行を図ることを目的とする。

(定義)

- 第2 この指針において、FDとは、大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組を指す。
- 2 この指針において、「部局等」とは、学部、研究科及びセンター等、FD活動において組織的な取組を実施する主体を指す。
- 3 この指針において、「教員」とは、本学の常勤及び非常勤の教員を指す。

(大学の責務)

第3 本学は、その教育理念や教育目標を実現するために、全学のFD活動の内容や方法を点検・評価し、その結果を踏まえ、適宜、各部局の環境整備及び各教員のFDへの取組に対して支援を行う。

(部局等の責務)

第4 部局等は、学部・学科等のカリキュラムが教育目標やアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーと整合しているかどうかを点検・評価し、必要に応じて、カリキュラムの開発・改善に努め、教育の質の向上を図る。

(教員の責務)

第5 本学の教員は、自らが担当している授業の目標やシラバスの検討を随時行い、学生理解・支援、授業内容、授業方法、教育評価及びカリキュラム開発・改善に関する知識・技能を高めることに努める。

Ⅲ
鹿児島大学
の
FD活動

第1部
全学的取組

新任教員FD研修会

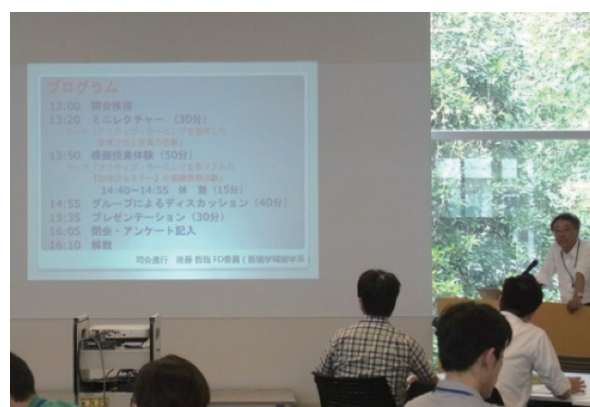
1. 概要

- テーマ** 「アクティブ・ラーニングの基本と活用術」
- 日時** 平成27年 9月17日(木) 13:10～16:10
- 場所** 郡元キャンパス 学習交流プラザ 2階 学習交流ホール
- 対象** 平成26年 7月 2日～平成27年 7月 1日 の間に本学に採用された新任教員
- 参加者** 27名

2. 研修会の趣旨

本研修会は、主にこの1年間に鹿児島大学に教員として採用された教員が、本学が目指す教育を理解し、それぞれの教育活動として推進することを目的としている。

今回の研修は、「アクティブ・ラーニングを活用した教育方法と教員の役割」について、ミニレクチャーを受講し、アクティブ・ラーニングに対する理解を深めるとともに、来年度の共通教育改革に伴い新入生に対し開講される「初年次セミナー」の模擬体験授業に参加することで、学生の立場に立ったアクティブ・ラーニングの活用法を考える機会となることを期待して企画した。



3. 当日のプログラム

13:10	開会挨拶	清原 貞夫（鹿児島大学理事、鹿児島大学FD委員会委員長）
13:20	ミニレクチャー 「アクティブ・ラーニングを活用した教育方法と教員の役割」	伊藤 奈賀子（鹿児島大学教育センター高等教育研究開発部准教授）
13:50	模擬授業体験 「アクティブ・ラーニングを取り入れた『初年次セミナー』の模擬授業体験」	寺床 勝也（鹿児島大学教育センター高等教育研究開発部長）
14:40	休憩	
14:55	グループによるディスカッション 「こうすればもっとアクティブ？ ～アクティブ・ラーニングを取り入れた授業における教員の役割～」	
15:35	プレゼンテーション	
16:05	閉会・アンケート記入	
16:10	解散 (司会・議事進行：後藤哲哉FD委員)	

4. 研修会のまとめ

ミニレクチャーでは、アクティブ・ラーニングが導入されるようになった背景とアクティブ・ラーニングの課題について紹介があり、教員が果たすべき役割について考える機会を設けた。

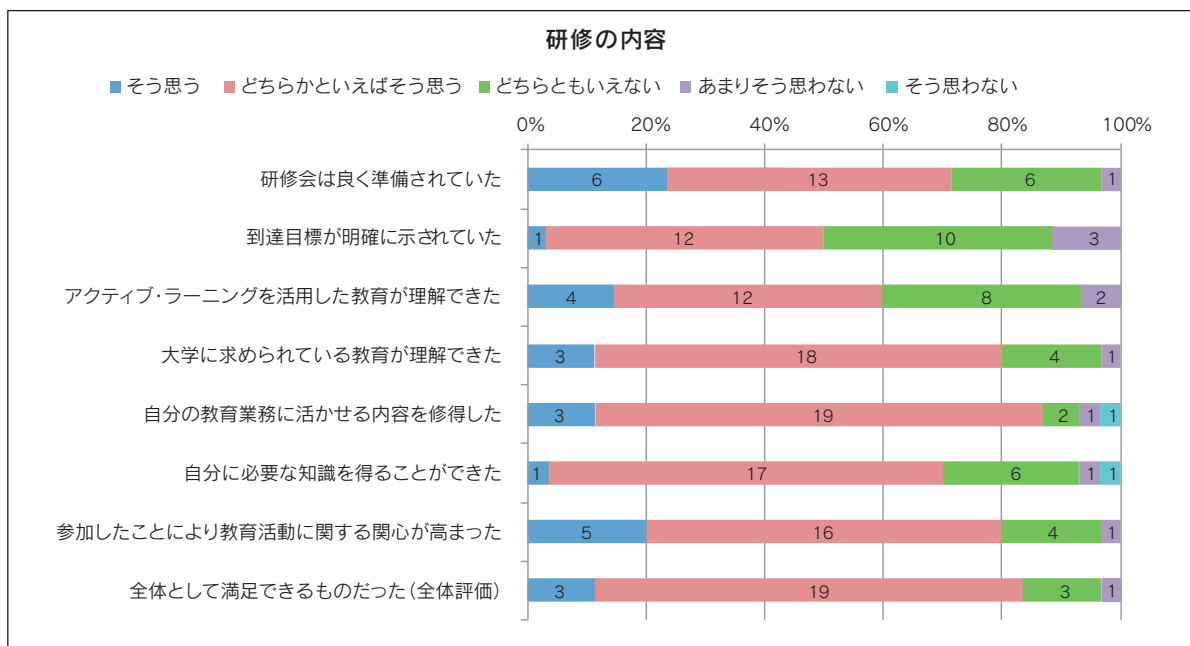
次に、模擬授業として、平成28年度から開講されるアクティブ・ラーニングを取り入れた『初年次セミナー』を実施した。ここでは、「課題を明確に提示しない」、「授業者が可能な限り積極的に関与しない」など、受講者が混乱しやすい状況を提供し、学修者としての立場からアクティブ・ラーニングにおける教員の役割を考える機会となるよう企画した。模擬授業内でのグループごとの口頭発表では、グループで課題の受け取り方が異なり、教員の関与や指示が学習者のグループ討議に重要であることが再認識できた。

次のグループ討議では、アクティブ・ラーニングをどのように授業に取り入れるのか、教員の役割について5グループに分かれ議論した。グループ分けは専門分野横断的におこなったが、専門分野でのアクティブ・ラーニング実施例の紹介などもあり、有効であった。グループ討議ではアクティブ・ラーニングをどのように取り入れるのか、大人数講義での導入、テーマの設定法や評価方法など特色ある議論がなされ、各グループからアクティブ・ラーニングを用いた授業改善の報告がなされた。

今回の研修を通して、アクティブ・ラーニングを効果的に進めるための教員の役割の重要性を理解し、学生の立場に立ったアクティブ・ラーニングの活用と支援を行うことができる、という目標を参加者に自覚してもらうことができた。

事後アンケートでも、「アクティブ・ラーニングを活用した教育が理解できた」、「大学に求められている教育が理解できた」、「参加したことにより教育活動に関する関心が高まった」などという全項目で、高い満足度が示された。

(事後アンケート結果から抜粋)



【自由記載欄意見例】

アクティブ・ラーニングについて、欲しい情報があればお書きください。(自由記述)

- 学習分野別の事例
- アクティブ・ラーニングに適さない科目での具体的な手法を聞きたい。
- 具体的な例を示してほしい。体験したことがないのでよくわからない。
- 効果的な事例
- 一般企業(大学以外)でのアクティブ・ラーニングについて
- 少人数でのグループディスカッションのようなものでなく、大人数の講義でアクティブ・ラーニングをどう取り入れるか、具体的に教えてほしい。
- グループディスカッションに関連する手法等
- 成功／失敗している例を教えてください
- 外国ではどうやって行っているのか？
- 予定しているテーマを教えてくださいと有難いです。
- 教育同士の情報交換ができると良いと思いました。(授業のやり方など)
- 授業に活かせる具体的なスキルを教授くださるとありがたいです。
- 実践例の参考書籍、HP等ございましたら、ご教示ください。
- 具体的にどのような実践をしているのか、様々な分野の先生方の工夫例などが知りたいです。理念的なことは理解できても、実施しようとする時のロールモデルがほしいです。

本研修会及び今後参加を希望するFD研修会のテーマについての意見・要望等

- 学生にとって良い授業の例、悪い授業の例
- 「大学での学び方」を学生にどう教えるか
- 「初年次セミナー」は良いモチベーションアップにつながると思います。



(文責:水産学部 石川 学)

FD・SD合同フォーラム

1. 概要

テーマ カリキュラムの体系性の可視化に向けて

日時 平成27年10月3日(土) 13:00~16:30

場所 郡元キャンパス 共通教育棟3号館321号教室

参加者 99名(参加校:鹿児島大学、志学館大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子大学、第一工業大学、鹿児島高等工業専門学校、鹿児島県立短期大学、鹿児島純心女子短期大学、金沢工業大学、紀伊國屋書店)

主催 大学地域コンソーシアム鹿児島、鹿児島大学FD委員会

2. 基調講演

学生の学習成果を高めるためのカリキュラムの体系化とその可視化

講師:山田 剛史 氏(京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授)

①高等教育政策を俯瞰し、現況を掴む

我が国の高等教育改革をめぐる政策動向は、大きく3つの段階に分けられる。第1に、「教育改革の基盤整備」の段階である。これは、2004年に行われた国立大学法人制度及び認証・法人評価制度の導入に始まる。事前評価から事後評価へと大学に対する評価の仕組みが大きく変わり、競争的資金の存在感が強まった。政策的にはこの後、GP事業開始、教育内容等の改善のための組織的な研修・研究の実施が大学の責務として位置付けられるなどの動きがあり、大学の自主的な教育改革



推進に向けた基盤整備が進められたといえる。そして、第2の段階は、2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」を契機とした「高等教育システムの構築」の段階である。前段階に整備した基盤を踏まえ、教育改革に関するPDCAサイクルのうち、特にP・Dの部分の整備を強化することにより、大学教育における質保証の仕組みの整備が進められた。そしてこれを受けた第3段階として、学習成果への関心が高まっている。この契機となったのが、2012年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」である。

この間、高等教育に対する社会的ニーズは一貫して高まり、また、多様化している。少子化は今後も継続して進行するものと予測されると同時に、社会のユニバーサル化・グローバル化に対応できる人材の育成が急務である。その一方、大学に対する予算は削減が続き、高等教育修了者の就職先は世界的にも慢性的な不足状態である。大学は厳しい状況の中、質の高い人材を育成し、社会へと輩出することが求められている。

そのために重要なのが、整合性及び一貫性のあるカリキュラムの体系化である。近年、ディプロマ・ポリシー、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシーという3つのポリシーの策定、カリキュラム・マップやナンバリングの整備、アクティブ・ラーニング導入、IRの強化・推進等、新たな用語が次々と示され、大学に対して教育改革を求める動きは一層強まっている。しかし、それらひとつひとつに個別に対処していたのでは大学の疲労感が増すばかりである。そこで必要なのが、各大学が教育改革の全体像をきちんとデザインし、一貫したストーリーを作り上げることで、個々の教育改革の位置付けを明確にすることである。その中心に置かれるのがカリキュラムの体系化である。

②カリキュラム改革のグランドデザインを描き、ストーリーを作る

学士課程教育の体系化に向けてまず必要なのは、3つのポリシー、中でもディプロマ・ポリシー（以下、「DP」とする）及び期待される学修成果としてのラーニング・アウトカムズ（以下、「LO」とする）の明確化である。社会からのニーズを踏まえつつ、学生に身に付けさせるべき能力がDPやLOとして明文化されているか、なおかつそれらが構成員間で共有されているかが大きな課題である。

それを受け、現行カリキュラムがDP、LOを育成し得るものとなっているかの検証がある。そのための作業としてまず必要なのが、カリキュラムの可視化である。鹿児島大学も含め、昨今多くの大学が取り組んでいるカリキュラム・マップの整備やナンバリング制度の導入は、それぞれ可視化のための作業に当たる。カリキュラムが可視化されて初めて、現行カリキュラムの課題が明らかになり、必要な科目とは何か、どのような教育内容を追加あるいは統合すべきか、適切な教育方法とは何かといった議論が可能になる。アクティブ・ラーニング導入が政策的にも強く求められているが、それはカリキュラムの可視化を受けて初めて考え得るのである。

そして、カリキュラム全体とDP、LOとの整合性が確保された上で、個々の科目がその中に位置付けられるものとなっているかという検証が求められる。シラバスで示される各科目の到達目標等を確認し、体系的なカリキュラムの一構成要素として位置付いているかを明確にし、必要に応じて見直しを行うこととなる。

こうした作業はいずれも教育改革の最終目標ではない。カリキュラムは学生の性質や学力、社会からのニーズの変化を踏まえて継続的に見直す必要がある性質のものである。そのため、教員同士、あるいは学生との間でカリキュラムをめぐるコミュニケーションが常に行われ、各学問分野の知識構造に対する認識を深めていくことが最も重要だといえる。

③体系化と可視化、共有によるコミュニケーションの可視化

教育改革及び改善についても学習成果の可視化についても共通するのは、関係する構成員間でその現状や今後の改革の方向性を共有することである。そのために必要なのが、構成員間のコミュニケーションであり、その前段階として必要なのが可視化の作業である。カリキュラムが体系性を確保できているか、学生が期待される学修成果を示すことができているか、個々の科目はカリキュラム上の位置付けに見合う成果を出すことができているか、といった諸課題について、その結果を示す情報をできるだけ明らかにし、それを踏まえた持続的改善を行うことにより、大学全体としての教育改善が初めて実現されるといえる。

3. パネル・ディスカッション

学生の能動的な学修を促すカリキュラムとは

コーディネーター：有倉 巳幸(鹿児島大学 学術研究院法文教育学域 教育学系教授)

パネリスト：鈴木 雄清(志學館大学 人間関係学部 准教授)

川畑 秋馬(鹿児島大学 学術研究院理工学域工学系 教授)

廣瀬 真琴(鹿児島大学 学術研究院法文教育学域教育学系 准教授)

コメンテーター：山田 剛史



パネル・ディスカッションでは、まず鈴木氏から、「大学の教育目標を基軸とした科目マトリクス構築の試み」として、志學館大学における科目マトリクス構築の実践とその後の課題について報告が行われた。eポートフォリオ導入を契機として導入された科目マトリクスとは、いわばカリキュラム全体としてのルーブリックである。縦軸に教育課程を通じて獲得が期待される学修目標の項目、横軸にその到達レベルが示され、各科目はそれぞれのカリキュラム上の位置付けに応じてマトリクス上に位置付けられるのである。学修目標については、大学としてのDPからキーワードを抽出し、その内容を整理する形で整備された。科目マトリクスは学科ごとに構築されており、学生はマトリクスとリンクしたポートフォリオに学修履歴を蓄積していくことで、自身の学習状況及び目標達成度を認識できる。

続いて川畑氏からは、「本学工学部におけるカリキュラムの体系性の可視化の現状と課題」について報告があった。工学部ではJABEE(Japan Accreditation Board for Engineering Education=日本技術者教育認定機構)による教育プログラムの認定取得のために、全学的な教育改革に先んじてGPA制度やCAP制の導入、進級基準の見直しなどを行ってきた。これらは、教育改善が継続的に行われているかが審査の対象と位置付けられていることに関連する。カリキュラムの体系性の可視化についても同じ流れの中にあり、教育プログラムがどのような目標を掲げ、その達成に向けてどのような科目をどのように履修していくかがエビデンスに基づいて審査される。さらに新たな動きとして、学習時間の保証から目標達成度の評価へと、審査の力点が移行した。このため、学生が目標達成度を把握できるシステムの構築およびその可視化が大きな課題である。JABEE認定取得は教員の負担も少なくない。しかし、教員の教育改善に対するPDCAサイクルが確立し、科目間の連携に関するコミュニケーションが教員間で行われるようになった。科目間の連携についてはまだ専門教育の範囲に留まっており、共通教育と専門教育との連携についてはまだ不十分な状況がある。両者をどのように整合させていくかが目下の課題である。

最後に廣瀬氏から、「カリキュラム物語」というタイトルのもと、学習の履歴としてのカリキュラムという視点が示された。カリキュラム開発やその評価に当たっては3つのポイントがある。第1に、カリキュラムを講義の総体としてのみ捉えるのではなく、岐路や行き止まりなども考慮しながら教育・学修のシステムが学習者に対してどのように働きかけたかを丁寧に見る必要がある。第2に、思いやそれまでの学修経験が多様な学修者の存在を想定し、多様性のあるカリキュラムを開発する必要がある。そして第3に、全体的な計画だけでなく、個々の学生の学修経験に関心を寄せることが重要である。カリキュラムの評価に際しては、結果としての教育成果に注目が集まりがちである。しかし、学習の過程で生まれる様々な学修経験にも目を向け、それらを質的に評価することも必要なのではないか。大学において学生が経験するカリキュラムは人によって、あるいはその専門性によって大きく異なる。そのため、カリキュラムを微視的に捉えるだけでなく、学生が進んできた学習に関する道筋全体を巨視的にとらえる視点が一方で重要である。

「カリキュラム」という用語に対する解釈そのものがまだまだ参加者間で必ずしも一致されていないように見受けられる側面もあり、この課題について考える難しさも明らかになった。しかし同時に、カリキュラムをめぐるコミュニケーションの重要性がより際立ったともいえる。学生の学びの全てがカリキュラムの体系性の可視化で回収しきれないわけではない。組織としての教育の質保証、学士の質保証はもちろん必要不可欠である。しかし一方では、教員や学生が個々に行う質向上に向けた努力もなくてはならない。そうした努力が組織としての質保証と同じ方向に向けて行われるためにも求められるのが、学生をも含めた全構成員間でのカリキュラムをめぐるコミュニケーションだといえる。

カリキュラム・マップ作成やナンバリングの実施といった具体的作業が多くの大学で求められているものの、それらは枝葉末節に過ぎない。幹となるのはどのような人材育成上の目標を掲げ、その達成に向けてどのようなカリキュラムを構築・共有して実践に臨むかについて構成員間で丁寧にコミュニケーションを重ね、同一の方向へと努力していくことである。今回のフォーラムがそうした動きの契機になることを願う。

(文責:教育センター高等教育研究開発部 伊藤 奈賀子)



学生・教職員ワークショップ

1. 概要

- テーマ** 授業アンケートの結果をどう授業に活かすか
- 日時** 平成27年12月11日(金) 16:10～19:10
- 場所** 郡元キャンパス 学習交流プラザ2階 学習交流ホール
- 参加者** 40人(学生10人、教員24人、職員6人)
- 対象者** 教育に関心のある学生、教育に関わっている教職員
- 学生…各学部より推薦を受けた学生、自主参加希望者
教員…各学部、学共施設等の学生教育に関わっている教員、教務委員、FD委員
職員…各学部学生系職員、学生部職員

今回のワークショップでは、鹿児島大学で行われている「授業評価アンケート」の活用について、現状と問題点を理解し、学生の意見を活かした授業改善を組織としてどう行っていくのかを具体化する方策を考えることを想定して開かれました。

清原貞夫FD委員会委員長(教育担当理事)の開会挨拶に続いて行われた富原一哉FD委員による講演「授業評価アンケートの現状」では、授業アンケートは外的な要因から2004年以降、ほとんどの大学で実施されるようになったという経緯はあるものの、多くの労力と経費をかけて実施するからには授業改善に有効利用し、教職員・学生が共に幸せになれる方策を考えることが大事であり、それを踏まえた組織的な取り組みをいかに実現するかを論じるのが今回のワークショップの意義である旨が述べられました。

続く、山形大学地域教育文化学部教授の小田隆治先生の事例紹介「山形大学の授業改善アンケートの実践と再考」では、山形大学で行ってきた授業アンケートとその利用についての紹介がなされ、授業改善のツールとしての利用に限ることが必須であり、実施に当たっては労力・経費の両面での費用対効果比も意識すること、集計と公表が重要であること、自助努力に帰着する個の取り組みと同様にそれを支援する組織的な取り組みも必要であることが指摘されました。一方、活用方法には校風の違いや状況の違いがあるので、無批判に他大学の例を実施したりせず各大学での良心的な検討と実施が必要との点も指摘されました。現状からの脱却には、効果的な授業を行っている教員との授業技術共有や授業改善が上手くいかない場合の支援など組織的な取り組みこそが重要であり、個別教員に対する懲罰的な発想を持つのは間違っていると感じました。

その後、参加者は5班に分かれ、事前に割り当てられた①“授業改善に繋がる「授業評価アンケート」制度とは”②“「授業評価アンケート」をどのように教育改善に利用するか”という2テーマを中心に討議を行いました。

班での討議の結果、授業アンケートの実施時期を学期の半ばにすべきであり、学生へのフィードバックを早い時期に行うことが複数の班から提言されました。さらに、その前提として教職員と学生との間に入学後、できるだけ早期に信頼関係を築くことの重要性も指摘されました。また、上手い授業のノウハウを教員団で共有するという考え方をもち、全教員の授業能力の向上に活かせるような組織的な仕組みを作ることなども提言され、その意義が感じられるアンケート項目の例も提言されていました。



最後に、大和修FD委員から、討議の報告は事前に予想できる内容だったとはいえ、それを共有できたことの意義、自身の授業アンケートへの回答の変遷と授業構成との関係を例に取り、アンケートだけが授業評価ではないが、科学的分析に基づいて利用すれば授業改善に十分に役立つとの総括があり、参加者の大半が授業改善への意欲を高めることができたと感じました。

30名から回答があったアンケートの結果によると意義については25名が、積極的な参加については23名が肯定的な回答をしており、参加人数は限られていたものの、質の高い討議が行われました。自由記述でも、教員・学生とも授業改善の意識は強いことが互いに伝わり、ここでもコミュニケーションが重要であることが明らかとなりました。

なお、司会進行は松木繁FD委員が、記録は半田利弘FD委員が務めました。



(山形大学の小田教授による事例紹介の様子)



(グループディスカッションの様子)

2. グループ討議の主な内容

参加者は5グループに分かれ、2つのテーマの中から、事前に割り当てられた1つのテーマについて討議を行った。

A: 教育改善に繋がる「授業評価アンケート」制度とは

【A-1班】

◎現状の問題点、改善項目

- (1) 学生に、アンケートの回答に対するフィードバックがない。
- (2) 教員も学生の回答に対して信頼が持てない。
- (3) アンケートの趣旨がよく分からない。

◎提案

- (1) フィードバックは、15回の途中でやらなければ意味がない。(中間)の結果発表が重要。
- (2) 1年生は比較的真面目にアンケートに答えている。そのため1年生のうちからアンケートに対するフィードバックをしっかりと行い、アンケートに対する意義をしっかりと実感してもらう。真面目な回答が増えると教員もアンケートに対する信頼を得ることができる。
- (3) アンケートの趣旨を徹底して説明する。

【A-2班】

◎現状の問題点、改善項目

- 一部を除いてフィードバックが得られないものが多い。フィードバックが必要。

◎提案

- 学生と教員との信頼関係を作るためには、以下を繰り返す。
①フィードバックする。 → ②教員の熱意が見られる。 → ③学生が真面目にアンケートに回答する。 →
④フィードバックする。 → (以下、繰り返し)

【A-3班】

◎現状の問題点、改善項目

- アンケート結果がどう活用されているのか分からない。
- アンケート内容が講義・実習に対応していない。
- 同じ項目で評価されるのには違和感がある。
- Moodleで実施すると、回答率が低い。
- 回答者が特定される。評価に影響があるとの不安もある。

◎提案

1.フィードバックについて

- ・定期的に評価項目を見直す(回答の負担を増やさないようにする)。
- ・フィードバックの機会を設ける(14回目を実施し、15回目に対応等)。
- ・中間アンケートを活用する。

2.学生への開示方法

- ・前年度の意見・結果を、次年度に開示する(Moodleにて、公開している例もあり)。

3.学生に対する要望(アンケート回答について)

- ・不満だけでなく、良かった点も記入して欲しい。
- ・具体的に記入してもらおうと対応しやすい。

B:「授業評価アンケート」をどのように教育改善に利用するか

【B-1班】

◎現状の問題点、改善項目

- 授業方法、話し方などは学生にどう映っているのか分からない。
- 授業アンケート自体がそもそも役に立っているのか分からない。
- 前回指摘されたことは今回改善されたのか？
- 授業アンケートで評価されていることは授業のどの部分なのか？(印象的な1回なのか？全体の傾向なのか？)
- 授業アンケートから読み取るべきことは何なのか？

◎提案

- 授業方法が学生にどう映っているのか、話し方がどうなのか、ということについては学生に報告させるのが良い。
- アンケートの目的は、その授業を良くしようとすることであり、良くしようとする意志があることを示せばアンケートには意味がある。
- 学生の状況(予習や復習の具合、理解度…学力との関係に現れる)を見て、授業改善に役立てるべき。
- 問題のある学生の“問題”は1科目だけではないことから、“組織”での問題の共有化とすべき。
- アンケートからは“組織として”弱いところを読み取っていくべき、また、教員それぞれが自分の授業のために自分の問題点を読み取るべきである。
- 教員と学生同士、そもそもお互い“人間”としてのコミュニケーションが重要であり、アンケート以外でのコミュニケーションが大事である。教員に“動き”があると、学生も教員とコミュニケーションを取りやすい。
- 教員同士のコミュニケーションも必要である。“組織”として問題を共有化すべきである。
- 最終回でのアンケートは妥当なのか？ 中間アンケートや毎回の授業後のアンケートがあるともっと良いのではないだろうか。

【B-2班】

◎現状の問題点、改善項目

- アンケートによる指摘内容を素直に受け止め、改善。これが共有されれば、効率的で効果的、組織的に教授能力が向上するようになる。

◎提案

- 授業アンケートの最初に自由記述を持つてくる。
良いことを1つ以上、悪いことを1つ以上記入させるアンケートを作る。
組織的に教授能力が向上されるようなシステムの構築が必要である。



3. 事後アンケート結果

事後アンケート

2015.12.11

本日は、ワークショップへのご参加ありがとうございました。FD委員会では皆様のご意見を参考に活動を改善し、新たな企画を計画いたします。皆様の率直なご意見をお聞かせください。

(選択の部分は、番号を○で囲んでください。)

1. ① 学生 ② 教員 ③ 職員

2. 本日のワークショップは有意義でしたか。

① 全くそう思わない ② あまり思わない ③ どちらでもない ④ 少しそう思う ⑤ 非常にそう思う

3. あなたは、積極的に参加しましたか。

① 全くそう思わない ② あまり思わない ③ どちらでもない ④ 少しそう思う ⑤ 非常にそう思う

4. このワークショップに参加して、何が得られましたか。

[]

5. ワorkshopに対するご意見等を自由にお書きください。

[]

※今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。

[]

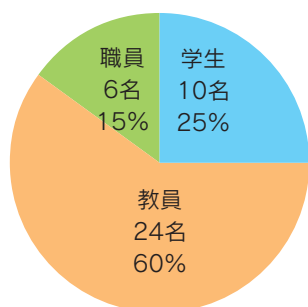
ご協力ありがとうございました。

事後アンケート(まとめ)

①ワークショップ参加者

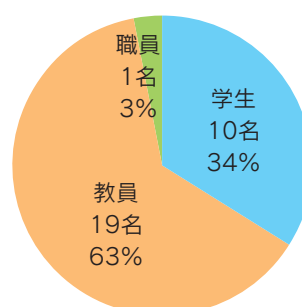
(グループ討議)

学 生	10名
教 員	24名
職 員	6名
	40名



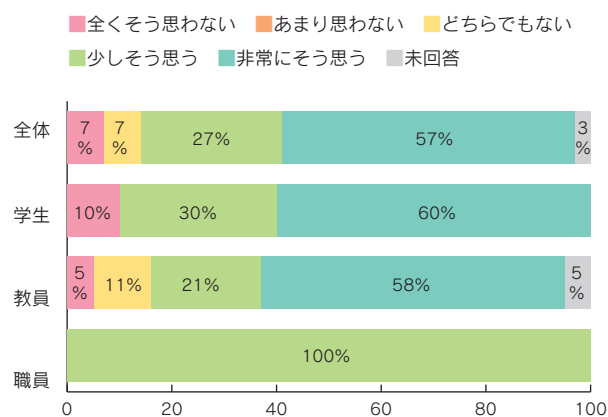
(アンケート回答者)

学 生	10名
教 員	19名
職 員	1名
	30名



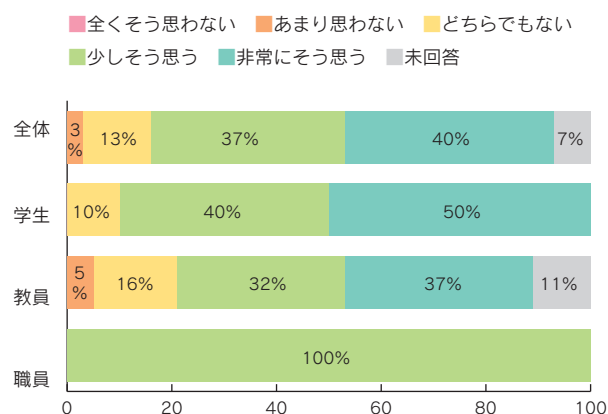
②本日のワークショップは有意義でしたか。

	全体	学生	教員	職員
全くそう思わない	2	1	1	0
あまり思わない	0	0	0	0
どちらでもない	2	0	2	0
少しそう思う	8	3	4	1
非常にそう思う	17	6	11	0
未回答	1	0	1	0
計	30	10	19	1



③あなたは、積極的に参加しましたか。

	全体	学生	教員	職員
全くそう思わない	0	0	0	0
あまり思わない	1	0	1	0
どちらでもない	4	1	3	0
少しそう思う	11	4	6	1
非常にそう思う	12	5	7	0
未回答	2	0	2	0
計	30	10	19	1



④このワークショップに参加して、何が得られましたか。

学生

- FDの結果によって、授業改善への取り組みが行われていることを知ることができました。どうやったら、教員の先生に伝わりやすく、改善点を教えるか考えさせられました。得られたものは、学校の授業を良い方向に持っていこうという姿勢を知ることができました。
- 大学ならではの難しさを感じました。そして組織的にやらないと全く意味のないことだと思いました。なぜなら、個人攻撃のようになってしまうことが1つ、もう1つがやる先生やらない先生が出てきてしまうからです。企業を考えれば会社のために個人の対応や個々の商品のアンケートは取られますし、取る方針の中個人が取らないなんて選択すれば解雇は当たり前だと思うんです。ただそれだと”大学らしさ”はなくなってしまう…。
- どの先生も、このアンケートの現状について真剣に話している姿を見ることができて、学生目線でとても嬉しいと感じました。
- 学部によってアンケートの形態が違うことがわかった。私はアンケートに対して関心はなかったが、先生方にとってはいろいろと考えることがあるということがわかった。
- 私は学生ですが、教員の先生方がどのような悩みを持ち、どのような気配りをされながら授業をされているのかということが垣間見えて、これから一層、学生と教員とのコミュニケーションは必要不可欠であり、その上で授業アンケートは1つの手段ではありますが、その生かし方をこれからも学生、教員共に熟考していくべきだと感じました。
- 教員側の意見を聞く機会は今までになかったため、このワークショップを通して、教員はどう思っているかを知ることができた。具体的には、アンケートの信頼性が低い(”ラクな講義”がよい評価になってしまう、学生がまじめに回答していると思えない等)ということだ。また、自分自身、アンケートの意義、主旨を再確認する場となった。
- アンケートが何のためにあるのか、アンケートが学内でどのように扱われているのが理解できた。また、学部によって学生に還元し、より良い講義が行われるために利用されていることを知られたので良かった。
- 教員目線でのアンケートについて、アンケートの意義、問題点
- 普段あまり気にしていないことを考える機会となった。アンケートに対する先生側からの考えを得られてよかった。
- 他学部のアンケート、そしてそのフィードバックの仕方を知ることができ、自分の学科、専攻について考える機会となった。授業に対する態度をふり返りより理想的な授業のカタチを想像し参加しようと思った。

教員

- アンケートを改革する際の注意点。ちょうど考えていたところだったので良かった
- このような、定型解がない問題に対応するには性善説に基づいた体制を考えないとうまくいかない。そう考えている人が多勢いる。
- これはというものは得られない、でも悪い感じはしない。色々な意見を聞き、色々な話しを出す事で、情報・問題を共有するのは必要。
- アンケートに対する共通の意見やユニークな考えも知ること(確認すること)ができた。
- 「授業評価」の改善策
- 学生意見と教員の受けとめ方の差
・組織的にアンケート活用してみようと思う気持ち
- 学生アンケートに対する学生の素直な意見を知ることが出来た。また、教員が真面目に学生に対応すれば、学生は評価してくれるということも実感出来た。

- 他学部とのアンケート実施方法や内容の違いがよくわかった。
 - ・アンケートのフィードバックの良い方法や案が得られた。
- 鹿兒島大学の中でも学部、学科によって授業アンケートの取りくみの差が大きいことが分かった。アンケートの問題点については結構共通していた。
- 学生からの率直な意見が聞けて参考になった。
- 学生さんのきもちが聞けたのはよかった。
- 学部によってアンケートのやり方がちがうことがわかった。
 - アンケートに対するフィードバックが重要←私はアンケートではないが、毎回質問をうけつけ返信しています。
- アンケートの目的を明確にすることの重要性が、わかった。(班内の活動で)
- 各先生方の情熱が強いと思いました。
- 途中から、非常に参加して良かったと思い始めた。学生の素直な意見がきけたと共に、教員が現状のアンケートについて、あまり信用していないことも分かって良かった。中間アンケートを真面目にやってみようという気持ちになった。
- アンケートの重要性について考えるようになった。
 - ・アンケートは先生の評価ではなく、授業改善や学生との信頼関係を形成できるツールになることがわかった。
 - ・学生からのさまざまな意見や、教員同志でも考え方のちがいや、共通の問題点などを知りえた。
- いろいろな意見を聞けて、プラスになりました。授業は最終の目標が学生に学力をつけること。
- 他学科での授業アンケートの良いとりくみ(中間、半期終了直前にアンケートをして、直後の授業中に30分ほど利用してアンケート結果として改善策を示していることで、学生自身がアンケートのメリットを実感して、まじめに記入するようになるというポジティブフィードバック)を知れた。
- 評価アンケートは、教育を良くするためと考えている方が多く安心感を得ました。
- 授業評価アンケートのいかし方について、改めて考えることができた。

④このワークショップに参加して、何が得られましたか。

学生

- ディスカッションの時間があっという間に過ぎてしまい、普段交流のない先生や学科の方と現状を話しあえて良い刺激になりました。
- 単純に、学生と教員がそれぞれの立場で意見をぶつけ合える場というものが高貴に感じました。自分としては、やはり授業の中間でまじめにフィードバックし、学生の意見に答えてくださる姿が大切ではと思いました。
- 工学部の先生方の参加を増やして欲しいです。
- 教員と学生が共に同じ問題について話し合う機会を、こういったワークショップ単発だけでなく、定期的で開催されると面白いです。学生の参加をもっとしてほしいと思います。(学生としてそう思います。)
- このように、学生、教員、職員をまじえて、自分らの大学をよくしていこうと討論することは、とても有意義でした。正直、最初は参加するのが嫌でしたが、参加してよかったと思いました。今回のワークショップの様子を、全学生、全教員に公開したらいいのではと思いました。意識改革は、一部の(しかも比較的前向きな)人に対してのみにやっても意味がないので、いかに全体に広げられるかも課題になるのではと思いました。
- 教員の方々もなぜアンケートが行われているのかが理解できていない所があり、生徒と教員と一緒にアンケートの活用方法について模索して良かったので良い時間だったと思う。
- 学生と教員とが同じ立場で話せるよい機会でした。
- あまり教員と議論する機会がなかったので充実した時間となった。自分の知識のなさを実感した。もっともっと勉強してより発言できるようになりたい。
- もっと多くの学生にもっと学科レベル専攻レベルで行えばよいと思った。

教員

- 今回は参加者が少なかったのが残念。
- このような場はもっと持つのがよいだろう。
- 定期的に行うのは必要です、一見、何も得られない様でも確実に考えは変わります。一人が二人…何百人と、その中で変わります。こりずに企画して下さい。
- 参加者が少ないのは意識や興味がないわけではなく、議論することさえも避ける程、重大なテーマであることが示唆されると理解した方がよい。さらに、議論を続けるべき。
- 学生の参加数を増やした方がよいと思います。
- 良い講師先生でした。ラジカル
- もう少し参加者を増やす必要がある。少なくともFD委員はもっと参加すべき。
- 資料として各学部のアンケート用紙があれば良かったのでは。
- 今回の結果を生かして欲しい。教育の改善には強力なリーダーシップが必要だと思う。
- 教職員と学生とが共に意見を交わせることは有意義であった。ただ、意見交換はできるものの結論が出しづらかった。
- 参加者が足りないのを、むりやりあつめて、短時間で強引に結論を出す。こういうことに何の意味があるのかしら。無理やりな面もある中で、なかなか上手にがんばっているとは思いますが。
- 率直に言ってアンケートには私はかなりネガティブな気分を持っています。おそらくはアンケートの内容が、私の目指す講義内容とあまりにちがうせいだと思います。
- テーマはもう少し具体的な方がよいと思います。

- 参加人数が少ないように思いました。テーマの主旨がよくわからないところがあり、活発な意見が出にくかったのではと思いました。
- もう少し、参加者を多くする様に事前の努力をするべきではなかったのか？参加者が少なすぎる。
 - ・今日のワークショップは、非常に質が高くて良かった。しかし、1000人もいる教員のうち、何故、20人程度しか参加しないのか疑問。
- ひとつのテーマで多方面から話し合いができる場である。委員であるのでしかたなく参加したのは事実です。しかし、講演と、グループ討論会を通じて、参加して本当に良かったと思います。
- このワークショップは有意義でした。全教員はローテーション的に参加したほうが良いと思います。
- 私は今年度着任し、後期から講義を担当しているので、そもそも鹿大でどのようなアンケート内容を、どのように行っているかが分からず、討議の初めの方は意見を言う以前に話についていくのがやっとなので、鹿大での現状をもう少し前提条件として初めに示してほしかった。
- もっと多くの教員が参加できると良いです。実は桜ヶ丘地区ではもう一つのFD研修が開催されています。日時の設定を配慮していただくと、ありがたいです。
- 特にはないが、教員の意識の向上を目指す委員会であれば、もっと、多くの教員に参加を義務づけるべきである。こういうワークショップに背を向けている先生ほど、こういう委員会に参加するべきであるからだ。今日は、出て非常に良かった。それは、今迄、モヤモヤしていたことについて、素直に議論できたからである。

※今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。

学生

- 小田先生の話でも紹介がありましたが、モデルとなる実例をもっと詳しく知りたいです。
- 授業の仕方についての改善点
 - アンケートではなく、授業自体をさらにわかりやすくするためにはどのようにすればよいか。
- アンケートのレイアウト、時期
- 鹿大のブランドをあげるにはどうすればよいか。

教員

- 教育に関する事でざっくばらんに喋る機会が必要。
- スチューデントアパシーやアスペルガーシンドロームなどへの対応についても議論してほしい。
- アンケート利用の第2段あっても良い。
 - ・民間企業的な視点でワークショップしても良い。
- どうすれば学生は大学での学修成果を実感できるのか？(つまり、「教育の可視化」は学生のためになっているか？)
- リーダーシップ
- GPAについて
- アクティブ・ラーニング
- 3ポリシーとカリキュラム形成

※自由記述欄は、一部誤字脱字を修正し、掲載しています。

(文責:理学部 半田 利弘)

鹿大版FDガイド第10号、第11号の発刊にあたって

平成27年度は、10月(10号)と2月(11号)にそれぞれ「離島における地域実習1」と「離島における地域実習2」を作成、刊行した。

鹿児島大学がCOC「地(知)の拠点整備事業」を実施する大学となり、「地域で活躍する人材を育成する」ことを事業の目的として掲げている。そのための教育として必須の「地域を知る」実習教育について、共通教育や国際島嶼教育研究センターなどで行われているものを知っている教員は多い。しかし、各学部で独自に行われている地域実習・離島実習については、他学部の教員には知る機会すらない。すでに鹿児島大学内で多数開講されている「地域を知る」実習教育の先行事例を知ることは、今後離島や地域での実習を新たに企画するために重要であり、また、学部が異なっても、時期や地域が重なる実習同士は互いに連携してより深い地域の理解を生み出せるかもしれない。

そのため、平成27年度のFDガイドでは、従来と趣を異にして、実習教育を取り上げることとし、その中でも主に離島で行われる実習に焦点を当てるようにした。

第10号では、まず、実習教育の意義を改めて述べ、続いて地域実習の利点を列挙した。これらは、すでに地域実習を担当している教員にとっては、当たり前のことばかりと思われるが、今後、地域実習を新たに企画・実施していく教員にとって参考になると考え、まとめてみたものである。この後に今年度のガイドの趣旨である、「地域を知る」実習教育の先行事例として、農学部生物環境学科森林科学コース「屋久島実習」および医学部保健学科看護学専攻「総合テーマ実習」について写真入りのインタビュー形式で紹介した。

ここで、気を付けた点は、記事を長くせず先行事例から学び取れることを具体的に示すために、「屋久島でやることの特徴や利点は何ですか?」「実習のコツや魅力は何ですか?」という設問を加えたことである。

第11号は、前号と同様の趣旨で、まず「地域を知る」実習教育の先行事例として、法文学部比較地域環境コース「フィールド学実習(地理学)」および教育学部「学校環境観察実習ー奄美大島における体験学習ー」を取り上げた。これに加えて、各学部で開講されている主な地域実習について、各実習の実施地域、開講時期を添えた一覧表を作成して掲載した。FDガイドWGでは、新たな地域実習を企画する際や学部の垣根を超えた地域実習の連携を模索する際の参考になればと願っている。

WGメンバーは 梁川英俊(法文学部)、假屋園昭彦(教育学部)、新地洋之(医学部)、采女博文(司法政策研究科)、坂巻祥孝(農学部)であった。

(文責:農学部 坂巻 祥孝)

FDガイド第10号



FDガイド第11号



さつつんカフェ

1. 概要

各回にテーマを設定し、当該テーマに関心のある教職員が集い、他者の意見を聴きながらじっくり考え、その後の実践や教育・学修活動の改善につなげることを目的とした取り組みとして、本年度は計5回実施した。具体的なテーマ及び開催日時は以下の通りである。

●第1回

- ①テーマ:学生はアクティブ・ラーニングを望んでいるか
- ②日 時:平成27年6月25日(木) 17:00-19:00

●第2回

- ①テーマ:改めて、単位制度を考える
- ②日 時:平成27年7月23日(木) 17:00-19:00

●第3回

- ①テーマ:アクティブ・ラーニングとは何だ
- ②日 時:平成27年9月24日(火) 17:00-19:00

●第4回

- ①テーマ:大人数クラスでのアクティブ・ラーニングの具体的方法とは?
- ②日 時:平成27年11月26日(木) 17:00-19:00

●第5回

- ①テーマ:学習成果の可視化とは
- ②日 時:平成28年1月28日(木) 17:00-19:00

2. 企画の成果と今後の課題

いずれにおいても筆者がコーディネーターとして参加し、テーマに関連した課題の整理や問題提起を行ったうえで意見交換を行った。専門家による講演ではなく、参加者それぞれが有する課題意識や解決方法を模索している教育上の諸問題について率直な意見が示され、解決に向けた議論ができた点は本企画の成果である。

一方、課題として挙げられるのは、参加者数の少なさである。実施曜日・時間帯の問題や周知期間の短さなどが原因として考えられるが、同時に考えるべきは教職員の関心の度合いである。関心はあっても時間の都合が付かないために参加できないのであれば検討の余地がある。しかし、現在の大学に求められている教育改革や改善に向けた取り組みに対する教職員の関心がそもそも低いがために参加者が少ないのだとすれば、本企画の改善だけでは解決できない。

重要なのは本企画の参加者数増ではなく、本学の教育改革や改善により多くの教職員が関心を持ち、主体的に取り組むことである。その結果として本企画の参加者が増えるのであれば、それは望ましい結果となる。参加者増に向けて運営方法については再検討を行うが、それだけを単発的に行うのではなく、他の取り組みと連携して教育改革への関心そのものを高めていくよう努力したい。

(文責:教育センター高等教育研究開発部 伊藤 奈賀子)

各回の告知ポスター(一部)

鹿児島大学FD委員会主催 第2回 さっつんカフェ

第2回テーマ：
**改めて、
単位制度を考える**



授業時間の目的
学習目的が必要?

単位制度って
そもそも
どうなってるんだ?

授業時間内にも
勉強しなきゃ
いけないんでー

分かっているようで分かっていない“単位制度”について、
今一度、考えてみませんか?

日時 平成27年 7月23日(木)
17:00~19:00
(事前申込み不要)

場所 学習交流スラザ2階
グループ学習室5

コーディネーター 伊藤奈賀子 准教授
(鹿児島大学教育センター高等教育研究開発部)

 お飲み物をご持参ください♪
1階の売店でコーヒー、おフロップ等が購入できます。

お問い合わせは学生生活支援課教育推進課まで
電話 099-2387-8800(内線 8802)

鹿児島大学FD委員会主催 さっつんカフェ

第4回テーマ：
**大人数クラスでの
アクティフ・ラーニングの
具体的方法とは？**

工夫しているけれども、
うまくいかないー

試してみたけど、負担が
多すぎて続けられない!

大人数で
何ができる?



**悩みや工夫を共有し合い、
次回の授業で生かせるヒントを見つけましょう!**

【日時】 平成27年11月26日(木) 17:00~19:00
【事前申込み】 不要
【場所】 学習交流スラザ2階 グループ学習室4
【コーディネーター】 伊藤奈賀子 准教授 (鹿児島大学教育センター高等教育研究開発部)

～さっつんカフェとは?～
座談会形式で行われる公開、無料、誰でも参加できる
学びの場。興味のある方はお気軽にご参加ください。
参加費は無料です。お気軽にご参加ください。

◆参加の申込み・問合せはこちらまで
鹿児島大学 学生生活支援課教育推進課
電話 099-2387-8800
担当 伊藤奈賀子 准教授
Eメール: hiro@edu.kag-u.ac.jp

教育センター高等教育研究開発部(共通教育) のFD活動

1. はじめに

平成27年度の高等教育研究開発部会は、前年度(平成26年度)からの引き継ぎ事項、ならびに教育センター年度計画を基に以下の活動を行った。

- ①授業アンケートの実施(中間授業アンケートを含む)
- ②授業改善メモの集約および教育センターホームページ等での報告
- ③共通教育の授業公開・授業参観の企画および実施
- ④大学IRコンソーシアム・アンケートの実施

ただ、今年度は、来年度(平成28年度)から実施される共通教育の大幅なカリキュラム改革の只中にあるため、授業改善に資するアンケート様式の見直しを含めて検討する年度と位置づけ、FD活動は前年度のルーチンを踏襲し実施することとした。

以下、上記①から③の各項について記述する。なお、④は別掲のためここでは省略する。

2. 授業アンケートの実施について

共通教育で行われるアンケートは、シラバスの中間時期に実施される「中間授業アンケート」と、学期末に実施される「期末授業改善に資するアンケート」の2種類がある。

「中間授業アンケート」は、授業担当者が直接学生から意見を収集し、後半の授業改善に活かすことを目的としている。実施時期は、前期が6月上旬、後期は11月中旬から12月初旬とした。実施方法は、紙媒体のアンケート用紙またはMoodleで、授業者が独自の方法で中間アンケートを実施する場合にはこの限りではない。アンケートの回収ならびに評価も授業者の判断にゆだねられているため、回収および集計等はせず実施率については把握していない。なお、教員からの要望により、これまで使用してきた中間授業アンケートを一部見直し、平成27年度後期では、教員側に明確な改善点が見えるような様式に変更し実施した。例えば、「教員の説明や解説は分かりやすいか？」の問いには、「はい、いいえ」の二択から、「分かりやすい、もう少しみ砕いて説明してほしい、参考となる資料・教材をもっと用いてほしい」の三択にするなど具体的な形式に変えた。

「期末授業改善に資するアンケート」は前後期の学期末に全学的に実施され、例年通りアンケートは回収集計が行われた。平成27年度前期は、対象科目数452科目のうち383科目で実施率は85%であった。そのうちMoodleによる実施数は76科目数のうち69科目であった。平成27年度後期は、対象科目数343科目のうち271科目で実施率は79%であり、そのうちMoodleによる実施数は69科目のうち49科目で実施された。いずれも例年とほぼ変わらぬ実施率であり、ここ数年横ばい傾向である。

アンケートの点数は、4件法により得点化され、設問番号Q2「この授業を受講して、知識を広げ自己を高めることができたか」の問いは高い評価で自己満足度も高い結果であった。しかしながら、設問番号Q10「授業に関連した内容について自主的に学習しましたか」の得点は最も低く、次にQ4「学習目標を達成できましたか」が続き、この傾向は前後期ともに同様の結果を示した。

3. 「授業改善メモ」について

「期末授業改善に資するアンケート」の集計結果は、共通教育担当教員に送付され、その結果に基づいて担当教員は「授業改善メモ」に記述し、高等教育研究開発部会へ提出する。高等教育研究開発部会では、回収した「授業改善メモ」を集約・分析し、多くの授業担当教員にとって、授業改善に役立つと思われる資料を整理し、教育センターのウェブサイトで公開された。平成27年度にウェブサイト公開した「授業改善メモ」は、平成26年度後期ならびに平成27年度前期の授業アンケート結果に基づくメモを収集・分析したものであり、以下に掲載する。

(1) 平成26年度後期「授業改善メモ」のまとめ

I 【授業改善に向けての試みや工夫】（文責：教育学部 高谷 哲也）

授業改善に向けての試みや工夫には、各教員から多様な試み・工夫が報告された。授業科目の特性に依存する部分もあると思われるため、「情報」、「選択」、「日本語」、「体育」の科目区分ごとに取りまとめ掲載する。

(1) 科目区分「情報」における「授業改善に向けての試みや工夫」

Moodleを活用した講義資料・内容・課題の公開、社会に出てから具体的に求められる技術に即した講義内容とすることが報告されている。

具体的に報告された主な工夫は以下のとおり。

- Moodleを活用し、授業で説明したスライドや資料、課題やその結果等はすべて公開している。レポートもすべて Moodleに提出させ、こちらで評価点をつけて返している。従って、レポートの提出状況を学生自身が管理したり、評価についてもいつでも確認したりすることができる。
- WordやExcelの利用法については、教科書に書いてある程度ではなく、社外文書やスタイルを活用した論文形式の書き方や、条件関数、日付関数など就職してから企業で役に立つ技術を中心に指導している。
- 講義資料や課題の配布（メール添付含む）を行い、習得レベルの低い学生には、適宜、TAと一緒に個別のサポートを行った。オフィスアワーも設けていたが、活用が少なかったことから、次年度は、グループワーク等も考慮して、さらに学生の理解度の向上に努めたい。

(2) 科目区分「選択」・「日本語」における「授業改善に向けての試みや工夫」

多数報告された試み・工夫を分類した結果、「内容構成・展開上の工夫」、「資料の工夫」、「フィードバックの工夫」、「グループワークの工夫」、「宿題・時間外学習に関する工夫」、「試験・課題に関する工夫」の 카테고リーに整理することができた。紙幅の都合により、以下には、各カテゴリーにおける工夫のうち、具体的な説明のあったものに厳選して掲載する。

(内容構成・展開上の工夫)

- 講義形式とグループワークをうまく結びつけること。
- 授業開始時に学習目標を板書している。
- 前半DVDを視聴して各授業テーマへの興味を喚起する話し方が、学生全般におおむね好評であるので、DVDを厳選し、一層効果的に使用していきたい。
- 教室内での講義だけでなく、構内での屋外観察を取り入れて、実物に学生が触れられるようにしている。
- 個人が課題をこなすだけでなく、クラスメイトや先輩の課題を参照することを通じてより多様な表し方を学ぶ機会を提供している。
- 毎回最初に、「あなた自身が、当事者でこういう状況の時、どう判断し、どう行動するか」という形の設定課題を出している。これによって、その回の講義内容の必要性や意義について、各学生が理解しやすくなると考えている。また、通常同じ設定課題に最後にも回答してもらい、学生の判断がどう変わるかを集計し、次回の講義で紹介している。

(資料の工夫)

- パワーポイントは、毎回新たに作成し、その配布資料についてもできるだけ見やすくなるよう努力している。
- 授業では動画やビデオを含むできるだけ多くの画像資料を用いるようにしている。
- 授業内容を少しでも理解しやすくするために、地図・図表・系図・年表等を資料として配布するとともに、授業の流れを纏めたレジメを毎回配布している。
- 授業で用いるスライドと同じ内容のものをカラープリントで配布し、受講者が必要に応じて書き込んでもらえるよう配慮した。

(フィードバックの工夫)

- 毎回講義の最後に提出させているレポートに記載された疑問点・質問には、極力次回に回答するようにし、講義で理解できなかった部分のフォローにつとめている。
- 毎回の授業感想シートを教員と往復させ、各人の興味・関心に沿って、考えが広がるようにコメントした。
- 身近なニュースをまずは大学周辺の事象から取り上げるようにした。毎回、提出させる感想レポートの一部を次の週の授業で紹介。一つの事象にさまざまな意見、感想があることを感じ取ってもらえたと思う。

(グループワークの工夫)

- グループでの話し合いの際、全員で共有しやすいように工夫している。
- 座席は知り合いでない他学部の人と毎回座ってペア学習やグループワークができるように学生に働きかけている。
- ディスカッションを多く取り入れたため、モチベーションの高い学生にとっては満足のいく内容になっていたと思う。新たな視点に気づいたり、個々人の関心をさらに深めることができるように努めた。
- それぞれの考え方を尊重した意見交換ができるように、一方的な意見の押し付けにならないように配慮した。
- 教員は何が問題か、何がおきているかを説明し、その後どのように考えるか、理解するかについて、学生同士のディスカッションを重視している。ディスカッションをするためには、事前の学習が不可欠であり、学生自身が主体的に学ぶことができるように工夫している。

(宿題・時間外学習に関する工夫)

- 毎回宿題を出し、その内容を前提として次回の授業を設計している。
- 宿題をしないとなれば次回の活動に支障が出るような形にすることで授業時間外学修をさせている。
- 時間外学習については毎時間に任意の復習レポートを課し、平常点として評価している。内容に関しては社会の変化を題材にしているので、視聴覚の資料を活用するようにしている。

(試験・課題に関する工夫)

- 小レポート(新聞記事をテキストにしたもの)と課題レポート(新書をテキストにしたもの)を課し、期末試験での答案作成に向けて段階的に長文での論述になれるようにしている。
- レポートを単なる論述だけでなく、受講者の興味に応じて創作的な要素も取り込み、主体的に取り組めるものとしている。

(3) 科目区分「体育」における「授業改善に向けての試みや工夫」

本科目区分において共通してみられる特徴的な試み・工夫として、「教員と学生間の信頼関係の構築」や「学生間の人間関係」を大切にしたい取組が報告されている。実際に報告された内容は以下のとおり。

- 毎週の学びや感想に関するレポートを提出させる点にこだわっている。その理由は、知的理解(学び)以前に、教員(大学)と学生間の信頼関係の基礎をより強くするためである。
- 個々の学生の言動についてさらに丁寧な対応を心掛けた。
- 編入生や再履修の学生と思われる学生達が抵抗感なくスムーズに学びができるよう配慮した。
- グループ分けに最大限配慮した。男女別、能力別、経験別を踏まえてのグループ分けとした。
- ペア、グループなど協力して活動できる学習内容を工夫した。身体活動を通してのコミュニケーションの広がりを持たせる学習上の工夫を通して、協力、協調、グループ全体の技術向上を学生間で自然にもてる関係性を構築するよう努力している。

II【授業改善に関連した意見・要望等】(文責:教育学部 高谷 哲也)

授業改善に関連した意見・要望等については、大きく分けて「本取組やアンケート実施方法等について」と「施設設備に関する事」について、意見・要望が寄せられている。

本取組の意義・効果に対する一定の評価がある一方で、実施方法の信頼性・妥当性を検討し直す必要性も指摘されている。それらについては、今後の実施方法を具体的にどのように改善・洗練していくかという側面において非常に重要な指摘であると考えられる。そのため、「今後の本取組に対する意見」という項を追加し、具体的に報告された意見を掲載する。

(本取組やアンケート実施方法等について)

- 中間授業アンケートは、後半の授業改善のための役に立っている。
- 授業改善について、教員間で意見交換ができる場をもつことはなかなか困難なので、意見をまとめていただくと参考になる。
- 「学生による授業評価アンケート」の結果で自分の授業をフィードバックしてみることができ、今後の授業改善に活用することができてありがたい。
- 「授業改善メモ」を作成することで、次の授業をどのように改善すべきかの視点が整理できる。
- 最高値4.0の評定のついた授業はきっと学生のモチベーションも高いものと思われるため、ぜひ参観してみたい。
- 4点の高評価を受けている方々が評価を受けている要因を知り、可能であれば良い点を自身の講義にも応用したい。
- Moodleでのアンケート調査の場合、ブラウザを起動したり、Moodleにログインしたりと、面倒なプロセスが絡むので、紙を配布して全員に回答させるよりも、学生がより自発的にアンケートに答える形になるので、割と正しい回答を得られていると思う。しかし、そのプロセスが面倒な学生が大多数なので、必然的にアンケート回答数が少なくなってしまう。

(今後の本取組に対する意見)

- “中間アンケート”や“授業評価アンケート”は、担当講義外で実施した方が、もっと学生の生の意見が聞けると思います。
- 学生を満足させるのが良いこととはかぎらない。もっと知的に飢えさせる必要も感じる。
- 一律にすべての講義でアンケートをするのはもう止めませんか。行いたい教員・講義だけで行えば十分です。あとは無駄だし、弊害もあります。このような「授業改善メモ」を一律に書くことを義務づけるのも止めませんか。
- 授業がシラバスどおりにすすめられたかどうかについて、評価が低めであった。しかし、これはむしろ必要なことであると考えている。参加学生の専門性や関心に沿って、深く学ぶ部分やさらっと流す部分などメリハリをつけて臨機応変に対応することが常に必要であると感じている。
- アンケートでは、「あまりそう思わない」や「そう思わない」と回答する場合、その理由を具体的に書かせるようにすべきである。理由がはっきりしていれば、ただちに対策が講じられます。アンケートの回答の仕方の改良を検討いただければありがたい。
- 「授業改善に資するアンケート結果」については、体育・健康(実習)のデータが実習Ⅰと実習Ⅱが分けられたデータではないので、比較検討が難しい。授業内容、形態が異なるので、できれば実習ⅠとⅡは分けたデータ集計をしていただけたら、分析が更にしやすいかと思います。

Ⅲ【授業改善に関連した意見・要望等】(文責:法文学部 鳥飼 貴司)

今回も各教員から授業改善に関する様々な意見・要望等が寄せられた。寄せられた意見・要望等に記されていた内容について、平成26年度前期「授業改善メモ」のまとめを踏襲して下記の4項目に分類することにした。以下の分類は便宜上のものであり、分類が適切でないものがあるかもしれないがご海容頂ければ幸いである。また、要望などについては文責者が簡略化すべきではないと判断したものについてはそのまま記載した。

(1) 授業改善メモに関して

- 授業改善メモを作成することは、自分の授業を振り返り、次回の改善を考えるのに役立つと思う。しかし、こうした成果を同じ分野の授業と共有していく取組も必要ではないか。もっと組織的に改善できるような取組も企画してもらえるとありがたい。
- アンケートQ6の発言や質問し易い配慮とは、何を期待しているのかよく理解できない。学生諸君が発言し易いと感じる必要があり、そういう雰囲気を作り出すことが求められているのであろうか。私語や雑音を禁じると、この項目に影響があるのではないか。
- 卒業時に共通教育で学んでよかった、あるいは学びたかった事項についてアンケートをやって欲しい。

(2) 組織的取組による教育改善の提案

- 学生が筆記体に慣れておらず、活字体での板書に違和感を持っている。
- 担当教員の負担が大きいため、教員・非常勤講師のサポートをお願いしたい。
- ALL CLASSES SHOULD BE 1 YEAR IN DURATION.
- 進学率の上昇により以前より習熟度の低い学生が入ってきているのではないかと思う。勉強の仕方が身につけていない学生がかなりいるようだ(質問に来た学生複数と話した印象)。それをふまえた取組を行ってゆくべきではないかと思う。

(3) 備品等環境整備の要望

- 大きな教室で行いたい(グループ討議するには狭い)
- Moodleなど工学的技術を駆使できる環境が欲しい。

(4) その他

- 教育者として教えるべきことと学生側の要望にミスマッチがあるなかで学生による点数付けで講義を評価することが教育にどのような効果を与えるかについては、今後も敏感でいて頂きたい。その様な点に関して、授業アンケートだけでなく、現在鹿児島大学はすぐれた方針で臨んでいると思いますが、将来的にこの了解事項がもし失われたならば、そのときには教育に深刻な影響を与えることになると思います。

以上のように、授業改善に関するさまざまな意見が寄せられた。「1.授業改善メモに関して」は、授業改善メモの実施自体には肯定的な意見があった。しかし、一方でアンケート内容について「よく理解できない」とする意見もあった。また、卒業時において、学生が共通教育を振り返るためのアンケートを実施して欲しいとの要望もあった。「2. 組織的取組による教育改善の提案」には、教育改善に対する具体的な提案もなされている。今後の建設的な検討の契機になれば幸いである。「3.備品等環境整備の要望」では、グループ討議などに利用できる大教室、ホワイトボードなど設備に対する要望があった。またMoodleの利用に対する要望が寄せられた。「4.その他」では、非常勤教員のオフィスアワーに対する配慮を求める意見があった。また、教員の求める教育内容と学生の求める教育内容にミスマッチがある点は、今後共通教育の内容がどうあるべきかという検討事項になると思われる。

(2)平成27年度前期「授業改善メモ」のまとめ

(編集:教育センター高等教育研究開発部 伊藤 奈賀子)

高等教育研究開発部会では、共通教育科目等で開講される授業で受講者による「授業アンケート」を実施し、その結果を各担当教員にフィードバックしています。そして、「授業アンケート」の結果等に基づいて、各担当教員から「授業改善メモ」が提出されていますが、この授業改善メモには教育改善のための有益なコメントや要望等が多数含まれていますので、ご提出いただいた「授業改善メモ」の内容を高等教育研究開発部会で取りまとめて公開しています。

以下に、平成27年度前期に開講された授業の「授業改善メモ」のまとめを、ご紹介いたします。

1. 授業改善に向けての試みや工夫

各教員から様々な試み・工夫が挙げられた。特に、英語や情報科目については授業科目によりそれらの試み・工夫には分野独自の内容がみられたため、それらについては別項目として列記する。

- 講義は極力客観的に進めたが、学生が小学校から高校の授業のように、他人事、起きた事項を覚えるのが勉強などと思わないように、絶えず考えて欲しいという視点で話をした。一定の成果はあったと自負している。この講義はどちらかといえば「知識伝授型」になるのだが、その中でも極力、主体的に考えるようにさせるために、講義中、「皆さんは、どう考えるか」、「あの判断をどう思うか」と質問を多く学生にぶつけた。
- テキストに書いてあることの説明だけでなく、テキストの著者へ批判的検討を加えることも。学生の書いたフィードバックシートへのコメント。受講生の感想の紹介など。この講義の特徴は「知識伝授型」でもなく「生き方を考える型」でもなく「思索重視型、考える型」の講義なので、テキストに、その時間ごとの「問い」を私が書き、学生自身の思索の過程を書き込む「メモ」欄を設けた。
- 知見・知識の説明だけでなく、その応用・活用方法も教えることで、知識の定着度および理解度を上昇させることを心掛けている。
- 講義資料を全てPDF形式でMoodleに掲載。資料は印刷せず、学生は個人のスマートフォンやタブレットで資料を閲覧する。ハードウェアの仕組みなど動画を用いることでイメージできる様工夫している。各学生自身の出席状況をMoodleにてそれぞれ学生が確認できる。出席カードの裏に授業の感想、質問等が書ける自由記述の欄を用意。学生が記述した授業の感想、質問等について、毎回Moodleにて回答を公開。
- 時間割にオフィスアワーを組み込み、且つ、端末室も確保している。学生には「全員参加」と指導している。この時間、TAが学生の質問対応を行っている。多くの学生はこの時間に課題を仕上げている。

【英語】

- 授業中はなるべく説明する時間を短く、グループワークやペアワークを取り入れて、学生が読み・書き・話し・聞くなどの活動する時間を長くとるよう心掛けた。
- 毎回の小テストの実施・返却・評価を通じて、受講生の理解度を確認し、授業に対するモチベーションの向上を図っている。これは受講生にも好評であった。また練習問題等は指名によらず、自発的な挙手を求め、正誤を問わず評価することにより、能動的な授業参加を促している。これはQ6(発言や質問しやすい配慮が感じられたか?)およびQ7(授業の構成や進め方)に対する高い評価にもつながっている。
- オーソドックスですが、お手本の英文から、応用のきくフレームワークを抜き出し、それを自由英作に活かしてみることを予習で課すようにしています。テキストに語句の意味チェックのみの単純な設問がある場合は、語句を用いた具体的な自由英作文の応用例を準備し、クラスでも具体的な表現例を増やすよう心がけています。

【情報】

- コンピュータリテラシーの演習だけでなく、それらの知識や技術を生かして、医学医療に関連したグループワーク課題を与え、講義の最終段階で、発表の機会を与えた。わかりやすい資料作成やプレゼンテーション技術など、グループワークを通じて、興味を持ちながら取り組めるようにした。
- 「情報活用基礎」はパソコンを用いた実習を伴う科目である。授業ではTA 学生2名を配置し、学生からの質問等や個別指導などを行っている。成績評価は毎回の授業での評価や何回かの課題レポートで判定することになるが、数年前から試験期間に30分の筆記試験と60分の課題作成試験を実施しており、この試験結果を成績評価に含めている。この筆記試験+課題作成試験を行うようになってから、教員やTA 学生への質問も多くなり、学生の授業に対する取り組み方が意欲的になってきた。

2. アンケートに関する意見・要望等

授業アンケートについては、様々な意見が出された。特に、中間アンケートについては、下記のとおり対照的な意見が出されており、今後の改善や方針について今一度検討する必要がある。中でも、毎回受講生からの意見やコメントを提出させている教員も一律に中間アンケートを実施すべきかについては検討課題である。

- 中間アンケートにもとづき、修正をしているので、中間アンケートは今後も実施して欲しい。
- 毎回、授業に対する感想その他を書かせて提出させている。中間アンケートを実施するメリットはなく、時間や手間の上でのロスになっている。
- 中間アンケートは、効果的であったという記憶がないので、事務処理量を増やすだけで必要ないと思う。

また、授業アンケートの実施方法については、記名での実施のほか、具体的な改善策を検討する材料として回答理由を記入できるようにすることについても提案があった。また、授業アンケート結果の教員への示し方や、収集したデータの分析・活用方法についても問題提起がなされた。これらについては、今後、教育センター高等教育研究開発部会で議論していきたい。

- どの学生が何を考えているかがわかれば、今後の対策がとりやすいと思う。特に、中間アンケートに関しては記名をしてはどうか？
- 中間アンケート・期末アンケートとも、質問項目について申し分ないが、「あまりそう思わない」、「そう思わない」と回答した場合、理由の明記を求めておけば、より一層授業改善につながると思う。
- 授業改善メモを作成することは、自分の授業を振り返り、次回の改善を考えるのに役立つと思う。しかし、こうした成果を同じ分野の授業と共有していく取り組みも必要ではないか。もっと組織的に改善できるような取り組みも企画してもらえるとありがたい。
- アンケートの回答と、学生の成績、授業態度(学生の自己申告でない)の関係を知る事は出来ないでしょうか。
- アンケートにて学生の満足度を問題にしているが、成績と満足度に相関があるのか？疑問を感じた。難しい授業をすると人気さが下がり、満足度も下がる。しかし、大学の授業到達目標を下げることにもなり熟慮が必要であると感じた。今後、アンケートの改善メモには平均点と不合格者の数字を一緒につけることで学生が望む授業が見えてくるのではないだろうか？

3. その他

上記以外に示されたコメントの中から、非常に重要な問題を提起したものを以下に示す。この問題は共通教育に限られたものではない。指摘を真摯に受け止め、鹿児島大学としての対応を早急に検討する必要がある。

それは、高校までの履修状況と大学での必修科目の齟齬に起因する問題であり、同一学部学科内でも履修状況・学力に大きな差があることが教育上大きな課題となっている。共通教育においては、英語と同様に習熟度別クラス編成を行うことで対応することも考えられるが、そうした部分的な対応にとどまらず、大学全体として学力不足問題に対する適切な支援の在り方を模索することが求められている。

4. 共通教育の授業公開・授業参観の実施について

平成27年度前期の授業参観の結果は、参観科目数は11科目、のべ参観者数は11人であった。平成27年度後期では、4科目、4人であった。前期の参観者の多くは、特定学部が共通教育とコミュニケーションをはかるための組織的活動の一環として参加したものである。教員の自発的な授業公開・授業参観への参加は低水準に留まっている実態は昨年度と変わっていない。

高等教育研究開発部会でも、各部局における授業公開・授業参観の実施状況について情報交換を行い、その多くが授業参観者に求められる「授業参観アンケート」だけであるが、共通教育の場合、授業担当者がそのアンケートに応える「授業公開報告書」の義務付けとなっていることが、負担となり実施率が伴わないのではないかとの意見もあるため、今後、実施方法も含めさらなる改善検討が必要といえた。

(文責：高等教育研究開発部長 寺床 勝也)

高等教育研究開発部会委員名簿

高等教育研究開発部長	寺床 勝也
教育センター 高等教育研究開発部	伊藤 奈賀子、渋井 進(9月末まで)
法文学部	鳥飼 貴司
教育学部	高谷 哲也
理学部	和田 桂一
医学部	新地 洋之
歯学部	佐藤 友昭
工学部	平田 好洋
農学部	紙谷 喜則
水産学部	石川 学
共同獣医学部	松尾 智英



Ⅲ

鹿児島大学
の
FD活動

第2部

各学部・研究科の
FD活動報告